

2018年1月から本会事務局職員が在ボストン日本国総領事館に赴任しています。マサチューセッツ州の州都で、米国北東部の経済・文化の中心地の一つであるボストンから、経済社会の動きについて不定期にお届けします。

ボストンDATA

米国北東部、マサチューセッツ州都。面積232平方km、人口約70万人。米国建国の歴史を感じる街並みや世界屈指の所蔵品を誇るボストン美術館などの文化施設に加え、ハーバード大学などを有する文化・学術都市。

Red Sox—コロナ禍を乗り越えての復活



三塁側ダグアウト後方から撮影したFenway Park
観客席裏の屋上には農園がある



宮崎 喜久代

在ボストン日本国総領事館 領事
(経済同友会事務局より出向中)

スポーツ都市ボストンを代表するベースボールチーム

ボストンは、北米4大プロスポーツの各リーグ(アメリカンフットボールのNFL、ベースボールのMLB、バスケットボールのNBA、アイスホッケーのNHL)のチームが拠点を置いているだけでなく、国際的にも有名なボストンマラソンを開催するスポーツ都市です。そこで、今回は、日本でも馴染みがあるベースボールチーム、Boston Red Soxについてお伝えします。

Red Soxは、1901年に創設され(当時のチーム名はBoston Americans)、1903年に初めてワールドシリーズを制して以降、これまで9回の優勝を誇る歴史あるチームです。そのホームグラウンドであるFenway Parkは、米国に現存する最古の球場です。市街地にあるため規模は小さいですが、観客席とフィールドが非常に近く、選手のプレーを近くで見ることができるといわれています。観客席の裏手には、Fenway Farmsという都市型農園が企業などの協力により運営されており、ここで収穫された野菜は、球場で調理される食品に使われるだけでなく、地域にも寄付されているとのこと。

日本とのつながり

Red Soxは、在籍した日本人選手の延べ人数がMLBの中で最多のチームで、現在も澤村拓一投手が在籍しています。2021年のシーズン限りで引退を表明した松坂大輔選手が2007年にRed Soxに移籍した際には、日本から取材に訪れた記者が多く、Fenway Parkのプレス席には収まらなかったため、記者たちは奥の部屋に通され、松坂選手の登板試合をテレビで見ながら、その様子を“生中継”していたという逸話が残っています。また、Red Soxのホームゲームでは、8回裏の前に観客がニール・ダ

iamondの“Sweet Caroline”を歌う習慣があり、この曲は、マサチューセッツ州出身のケネディ元大統領を父とするキャロライン・ケネディ元駐日大使のことを歌っているという説があります。この習慣の由来はケネディ家とかかわるものではありませんが、日本との思いがけないつながりを感じます。

クラスター発生による戦力低下から アメリカンリーグ決勝戦進出へ

Red Soxは、2020年のレギュラーシーズンではアメリカンリーグ東地区で最下位でした。2021年は、新型コロナウイルスのデルタ株流行の影響を受け、8月から9月にかけて選手やスタッフの間に感染が拡大。陽性となった主力選手が欠場し、戦力低下を余儀なくされました。クラスターの発生は、クラブハウスなど屋内でのマスクの未着用や、感染予防のプロトコル緩和の基準となるワクチン接種率(85%)に達していなかったことが要因とされます。しかし、こうした状況下でも、控え選手たちの起用により勝利を重ね、ワイルドカードに進出しました。残念ながら、アメリカンリーグ決勝戦で敗退し、ワールドシリーズへの進出は果たせなかったものの、控え選手も含めた総力戦でコロナ禍を乗り越え、見事に復活したシーズンだったように思います。

他方で、パンデミックを機にプロスポーツチームの経営変革が加速しているようで、Red Soxを所有するFenway Sports Groupは、プライベート・エクイティから7億5,000万ドルの投資を受け、他のプロスポーツチームの買収などを検討すると報じられています。今後、こうしたプロスポーツ事業のグローバルリット化が進むと考えられます。